
謎の犯人

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

謎の犯人

【Nコード】

N5931U

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

あるドラマの関係者達を次々と襲う連続殺人未遂事件。その犯人は誰なのか。かなり変わった推理ものです。

第一章

謎の犯人

作家の安田雅美のところだ。自分の作品のドラマ化の話が来た。

「あなたも出るのね」

「ああ、探偵役でな」

夫の安田徹がその通りだと述べた。それは推理もので探偵が殺人事件の謎を解いていくというものだ。その作品がドラマになるというのだ。

「主役だけれどな」

「夫が妻の作品に主演ね」

「別にコネじゃないからな」

「ええ、それはね」

雅美もわかることだった。何しろ原作者である彼女に知らされたのは今だからだ。

そしてだ。夫は妻にまた言ってきた。

「共演者は若松千賀子に伊藤義重だよ」

「豪華ね」

どちらもだ。人気のある女優と俳優である。雅美はドラマはあまり観ないがその彼女でも知っている。それ程の二人だった。

「それでプロデューサーは古田明でな」

「敏腕らしいわね」

「監督は尾花彰彦、脚本は荒木信也なんだ」

「そっちも凄いわね」

「ああ、収録の見学に来るか？」

「そうさせてもらうわ」

雅美は笑顔で夫に応えた。そうして夫に案内されて見学に行くのだ。

休憩時間だった。一人の美人が席に座って煙草をすばすばとやっ

ていた。そうしてそのうえで周囲に笑顔で話していた。

「やっぱり。仕事の合間の一服っていいわよね」

「あの、若松さん今日何本目ですか？」

「もう一箱空けてますよね」

「二箱よ」

もう一箱多かった。周囲の言葉にこう返す。

「一日五箱。吸ってるわよ」

「好きですねえ、本当に」

「煙草が」

「煙草がなくて何の人生なのよ」

すばすばと吸い続けながらの言葉だ。それを止めることはない。

「だからよ」

「まあいいですけどね」

「煙草位」

周囲も呆れているがこう言うに止めた。そしてだ。

雅美はその彼女を見ながらだ。啞然としながら徹に問うた。

「あれが若松千賀子？」

「そうだよ。あの人がね」

「人柄はいいって聞いたけれど」

「実際にとってもいい娘だよ」

彼の方が年上である。だからこう言ったのだ。

「嫌いな人はいないわね」

「けれど」

それでもまだとだ。雅美はその啞然とした顔でまた言った。

「何、あの煙草の吸い方」

「ああ、あの娘へピースモーカーなんだ」

「そうだというのだ。」

「一日五箱吸うんだ」

「滅茶苦茶なへピースモーカーね」

「あれさえなければなあ」

徹は苦笑いで言う。

「完璧なんだけれどな」

「うっん、幾ら何でもあれば」

煙草を吸わない雅美から見れば呆れる他ないことだった。そしてだ。

昼はだ。そのプロデューサーの古田と食事を摂った。彼は力士の如き巨漢であった。

二人はレストランで古田の招待を受けて昼食と摂った。その彼の食事は。

分厚いステーキをだ。何枚も何枚も食べるのであった。それを見てだ。

雅美はだ。ここでも呆然となって言うのであった。

「あの、古田さん」

「はい、何ですか？」

「随分と健啖家なのですね」

「いやあ、肉が好きで」

笑顔でこう話す彼だった。

第二章

「それで」

「それでなんですか」

「はい、いつも食べてます」

また雅美に言ってきた。

「こうして」

「そうですか。毎日ですか」

「いやあ、美味しいですね」

古田はにこにことしてステーキを食べながら雅美に話す。

「食べてまた仕事頑張りますよ」

笑顔は温厚そのものだ。目の光も優しくそれでいてそこには確かなものもある。少なくとも有能な人物であるのはそうしたところからわかる。これも夫の言う通りだった。

それは雅美にもわかった。有能で人格もだ。

「何かねえ」

「ああ、古田さんの肉好きだね」

徹もそれに応える。

「あのことだね」

「あれ、身体に悪いんじゃない」

「あれさえなければね」

「こう言う彼だった。」

「最高なんだけれど」

「ううん、困ったことなのね」

「まあ仕方ないかな。人間誰にも欠点はあるよ」

徹は落ち着いている。それでもなのだった。雅美はそれが心配で仕方なかった。

しかも話はこれで終わりではなかった。夜はだ。

徹と対峙する役の伊藤と監督の尾花と交えて四人で飲む。その二

人は。

伊藤は何とウオツカをストレートで飲む。それもボトルを何本もだ。

それを見てだ。雅美は啞然として彼に問い返した。

「あの、ウオツカをですか？」

「ええ、それが何か」

伊藤は端整な顔を赤くさせて彼女に返した。

「ありますか？」

「お酒強いんですね」

「大好きなんですよ」

こう返す伊藤だった。顔は実に楽しそうである。

「もうお酒があればね」

「それにしてもウオツカをストレートですか」

「ははは、伊藤君は凄いねえ」

監督の尾花も上機嫌だ。彼はケーキやドーナツをオレンジジュースと一緒に食べている。

「僕は酒は駄目だからね」

「いやいや、監督も」

その伊藤が尾花に返す。

「甘いものいけますよね」

「そうだけれどね」

「僕はそっちは駄目ですから」

「こう言うのである。」

「だから凄いですよ」

「凄いかな」

「いつもそれだけ食べてますよね」

「甘いものが好きなのは確かだね」

それは尾花自身も言う。

「もうケーキとかね。毎日食べないと気が済まないよ」

「僕は酒で」

伊藤はそれだというのである。

「一日の最後はこれですよね」

「いやいや、酒豪だねえ」

「かも知れませんか」

こんなことを話して二人はどんどん酒や甘いものを飲み食いしていく。雅美はここでも啞然とすることになった。そうしてである。

次の日だ。雅美は朝二日酔いと胸焼けに苦しみながらだ。夫に話すのだった。見れば夫もだ。いささか苦しそうな感じである。

「あの、伊藤さんと尾花さんって」

「うん、ああなんだ」

「酒豪と甘党だったなんて」

「昔からだよ、二人共ね」

「いつもあなの？」

雅美は二日酔いの頭痛に苦しみながら夫に尋ねた。

「ああして。お酒と甘いものをあんなに」

「そうなんだ。いや、二人共いい人だけだね」

またこの言葉を出す徹だった。

第三章

「無類の酒好きと甘党だから」

「物凄かったわね」

「まああれさえなければね」

夫はまた言う。

「完璧なんだけれどね」

「けれど。煙草にお肉にお酒に甘いものって」

雅美は関係者四人の嗜好について述べた。

「どれもこれも」

「脚本の荒木君は真面目だよ」

「そういうことはしないの」

「そうだよ、一緒に来てたあの痩せた若い人」

それが荒木だというのだ。

「真面目で大人しいいい子だよ。いつも四人のうちの誰かに付き合
わさせられてるけれどね」

「大変ね、それは」

「そうだね。四人共凄いから」

雅美は徹の話を聞いて凄いどころではないと内心思った。

「もうそれはね」

「怨んでない？その荒木君」

「何で？」

「だから。あんなに煙草やらお酒やらお肉やらって」

「甘いものもね」

「付き合う方は大変よ」

雅美が言うのはこのことだった。

「強烈だから。あまりにも」

「そうかな」

「そうよ。本当に大丈夫なの？」

「だから四人共人柄はいいから」

それは雅美にもわかった。少なくとも悪人ではない。

「荒木君も人を怨むような人間じゃないしね」

「だといいいけれどね」

雅美はこの時は二日酔いと胸焼けのせいで深くは考えなかった。

考えられなかったと言ってもいい。だが数日後のことだった。

雅美が仕事をはじめようとした朝にだ。この日は泊りがけでロケに出っていた夫からだ。電話がかかってきたのであった。

「どうしたの、こんなに朝早くから」

「ああ、大変なことが起こったんだ」

こう妻に言ってきたのである。

「実はね。前に言ってた四人が」

「あの強烈な人達が？」

「倒れたんだ、一度に」

「えっ、倒れたって!？」

「とにかく。大変なんだよ」

夫はまた言う。

「事件なんだ」

「事件って」

話が一変した。そしてであった。

倒れた四人はそれぞれすぐに病院に担ぎ込まれた。四人共意識不明の重体であった。

しかもだ。その前の日に四人とそれぞれ一緒にいた脚本家の荒木にだ。疑いがかかったのである。

「彼四人に何かと付き合い合わせられてたしな」

「それで迷惑してたんじゃない？」

「それじゃあやっぱり」

「毒を盛ったとか」

こう疑いがかけられたのである。自然とだ。

それを夫から聞いた雅美はだ。その日のうちに撮影現場に向かっ

た。撮影現場は大変な状況だった。

「監督もプロデューサーさんも主役クラス二人もいないとね」

「うん、とりあえず最後の場面しか残っていないけれどね」

夫も困った顔になっていた。

「けれど。それでもね」

「四人も一気に抜けたし」

「しかも荒木君に疑いがかかってるし」

それもあつた。

「厄介なことだね」

「その脚本家のね」

「そうだよ。四人とそれぞれよく一緒にいたから」

それで疑われているというのである。

「そのせいでね」

「ううん、この事件はね」

ここでだ。雅美は腕を組んだ。そうして言うのであつた。

「荒木君よね」

「うん、だから彼が疑われてるんだよ」

「犯人じゃないわ」

すぐにだ。雅美は結論を述べた。

第四章

「絶対にね」

「僕もそう思うけれど今実際に疑われてるんだよ」

「その疑いを晴らす方法もわかってるわ」

雅美の言葉は速い。迅速である。

「私はもうね。全部わかったわ」

「全部なの」

「そう、その倒れた四人だけけど」

その四人についてだった。事件の被害者である彼等だ。

「今入院してるのよね」

「すぐに担ぎ込まれてね。そうなっているよ」

「その四人を調べればすぐにわかるわ」

その彼等をだというのだ。

「それで荒木君の容疑が晴れて事件の真相がわかるから」

「それだけでわかるんだ」

「そうよ。だからすぐに四人が入院している病院に連絡して」

雅美は徹にまた告げた。

「それで事件は解決するから」

「よし、それじゃあ」

こうしてだった。徹はすぐに病院に連絡してそのうえで四人が調べられた。その結果であった。

結論として荒木の容疑は晴れた。すぐにだ。

そしてだ。困ったのはむしろ四人の方だった。

番組が終わってからだ。彼等は周囲から呆れられた。ネットでもかなり書かれた。何故かというところである。

「ああなつて当然よ」

「当然なんだ」

「そうよ。四人共ね」

雅美は自宅のリビングでココアを飲んでいる。そのうえで向かい側のソファ―に座って同じくココアを飲んでいる徹に述べるのだ。た。

「今まであれで生きていつているのが不思議よ」

「ううん、どれも急性のだったんだ」

「ええ、ニコチン中毒にアルコール中毒に糖尿病」

「まずはこの三つだった。」

「そして太り過ぎでね」

「四人共それぞれの病気で倒れてたなんてね」

「あんな生活してたらああなつて当然よ」

雅美も呆れたような口調で述べている。その辺りはネットと同じだ。

「一日五箱もすばすば吸うし」

「それにお酒やお肉やお菓子は」

「過ぎたるは及ばざるが如しよ」

まさにそれだという雅美だった。

「不健康にも限りがあるわ」

「それネットでも言われているね」

「そうよ。連続殺人未遂事件ではなくて」

少なくともそれは完全に否定されていた。

「ただの。自業自得よ」

「そうなるね。確かに」

「それで。四人はどうなったの？」

雅美はその倒れた四人のことを尋ねた。

「退院したとは聞いたけれど」

「退院はしたよ」

それはだと答える徹だった。

「けれど。四人共ね」

「煙草やお酒は制限されたのね」

「かなりね。このまま続けたら死ぬってね」

「そうよ。あれじゃあ死ぬわよ」

「四人共ねえ。随分落ち込んでるよ」

そうなっているというのである。

「いや、本当にね」

「そんなに続けたければ命賭けるしかないわね」

「流石にあの四人でもそこまではしないから」

幾ら何でもというのだ。

「まあ。今回は本当にね」

「馬鹿な話だったわね」

「そうだね。一時はどうなるかって思ったけれど」

徹はココアを飲みながら笑顔で話す。

「いやいや、無事終わってよかったよ」

「ええ、何事もね」

このことは間違いなかった。何はともあれ事件は無事終わった。

ドラマも騒動の影響で視聴率は上々に終わった。ただ四人だけはだ好きなものを制限されるようになりそれに困ることになった。だがそれも周囲から当然のこととされた。何はともあれ話は終わったのだった。ただの騒動として。

謎の犯人 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5931u/>

謎の犯人

2011年7月4日03時19分発行